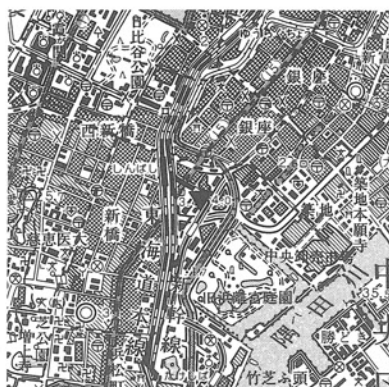


東京・汐留遺跡 しおどめ

- 1 所在地 東京都港区東新橋一丁目他
- 2 調査期間 一九九六年(平8) 四月～二〇〇一年三月
- 3 発掘機関 東京都埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 千野裕道・比田井民子・小林博範・福田敏一・小島正裕・小葉一夫・斉藤 進・竹花宏之・西澤 明・小林 裕・西山博章・石崎俊哉
- 5 遺跡の種類 縄文時代遺物包蔵地・大名屋敷跡・鉄道施設跡
- 6 遺跡の年代 縄文時代早期・近世・近代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(東京東北部・東京東南部)

汐留遺跡は、旧国鉄汐留貨物駅跡地にあたり、汐留再開発地区約三〇・七ha(南北約一・一km東西約〇・二七km)に広がる。東京湾沿岸部の低地に立地し、現地表面の標高値は北(銀座方面)より約四・一～二・五mを示す。

遺跡の主体は江戸時代の大名江戸屋敷で、北より播磨国竜野藩脇坂家(寛文二年(一六六二)信濃国飯田藩より転封、五万三千石)、陸奥国仙台藩伊達家(慶長五年(一六〇〇)所領確定、六二万石)、陸奥国会津藩保科家(寛永二〇年(一六四三)出羽国山形藩より転封、一三万石)の屋敷地が並ぶ(屋敷名は、以下「脇坂家芝屋敷」のように表記)。

以上の屋敷地は、脇坂・伊達両家芝屋敷に認められた初期造成の遺構と考えられる土留め施設(土留め竹柵・土留め板柵・石垣)から判断して、江戸湊沿岸域における沖積地の埋め立てであるいは地盤改良などの大規模な造成により形成されたと想定される。各芝屋敷は、大略表に示したような変遷を辿る。各々外郭域の大きな変化として、明暦三年(一六五七)を定点とする脇坂家芝屋敷拡張に伴う海手側の埋め立て、延宝四年(一六七六)を定点とする伊達家芝屋敷の大規模な船入場の埋め立て、延宝五年を定点とする保科家芝屋敷拡張に伴う海手側の埋め立て、宝永四年(一七〇七)新規道路造成による脇坂・伊達両家芝屋敷の縮小及び寛保三年(一七四三)伊達家芝屋敷の再拡張、を挙げることができる。

近代になると新橋停車場とその関連施設が建設され、その後構内南西部が東京馬車鉄道会社(一八八二年三月開業)の敷地となった。

本遺跡では一九九一年六月より二〇〇一年三月まで調査を行なった(一九九二年より東京都埋蔵文化財センターが調査)。調査総面積は約二六・六haである。九二・九三年度調査の出土木簡は本誌一九号で、

九四・九五年度調査の出土木簡は本誌二一号で、それぞれ紹介している。今回は、一九九六年度以降の調査で出土した木簡約七二点のうち、主要なもの八二点を紹介する。出土遺構は、近世の伊達家芝屋敷に関わるもの、保科家芝屋敷に関わるもの、近代の新橋停車場構内・東京馬車鉄道会社に関わるものに大別される。

近世の木簡は荷札類を中心に紹介するが、他に将棋駒・樽・桶・曲物・箆・膳・などさまざまな木製品に墨書が認められた。また、刻書・焼印のあるものも多数出土している。上記以外の文字資料では、木樋（墨書、未書、焼印）、上水樋底板・側板（墨書、焼印）、石垣洞木（刻文）に認められる。

一 伊達家芝屋敷

調査地は、伊達家芝屋敷の表向きを主体とする概ね西側半分と東側（海手）汐留川に面する庭園地区にあたる。木簡は、約三〇六点出土した。

出土遺構のうち、五H―六六六遺構・五H―七四三遺構は、屋敷の海手に位置する広大な船入場空間で、木簡はこの空間の埋め立て層から出土した。前者からは、墨書紀年「寛文六年」のある瀬戸・美濃窯飴釉香炉も出土している。これらの遺構は、延宝四年が下限と捉えられるが、紀年銘資料を加味すると船入場空間は上屋敷唱替時にはおおよその埋め立て造成が完了していたとみられる。五H―七二六遺構は、間知石組による護岸を有する池跡で、出土した紀年

銘資料・陶磁器の年代観から下屋敷段階の遺構と判断される。

六H―二六〇遺構は、船入場空間六H―七四三遺構の埋め立て後に構築された土坑で、紀年銘資料から延宝四年を遡らない時期、一七世紀後半には廃絶したと判断される。六H―二九二遺構は、海手汐留川に開口する船入場空間で、宝永四年の新道造営に伴い廃絶したと考えられる。

二 保科家芝屋敷

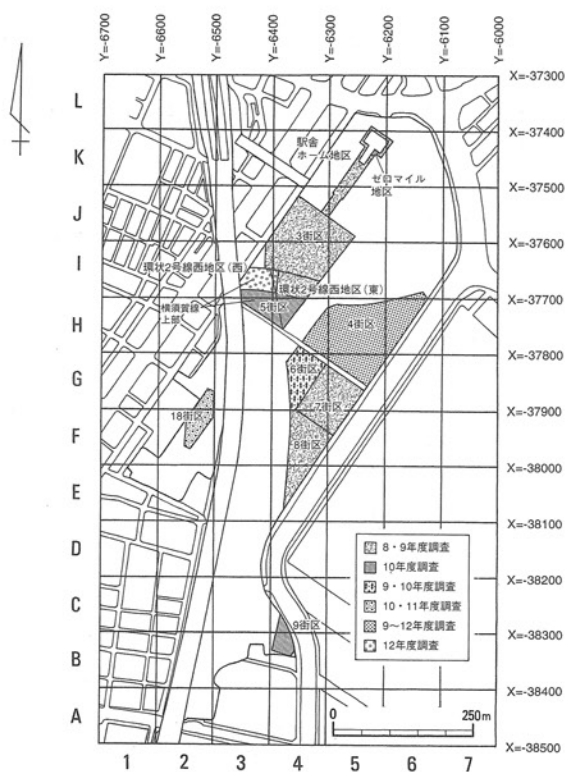
調査地は、屋敷地のうち汐留川に面する範囲である。木簡は、約三八一点出土した。

出土遺構のうち、四F―〇五五遺構・四F―一三五遺構・四F―一四〇遺構・五F―〇九八遺構・五G―三七七遺構は、いずれも中屋敷添地願いによる海手側屋敷拡張域で、土留め施設により区画された埋め立て空間である。五F―〇九八遺構は、海手寄り外郭線に並行する水路状空間であり、木簡はこの埋め立て層から出土した。四F―一四〇遺構は、最も海手寄りの汐留川に面し、拡張後の外郭域を形成する。四G―〇二六二遺構は、これら埋め立て層の最上層に位置する集石である。以上の遺構から出土した遺物は、上限を拝領年の寛永一六年、下限を延宝五年と捉えることができる。

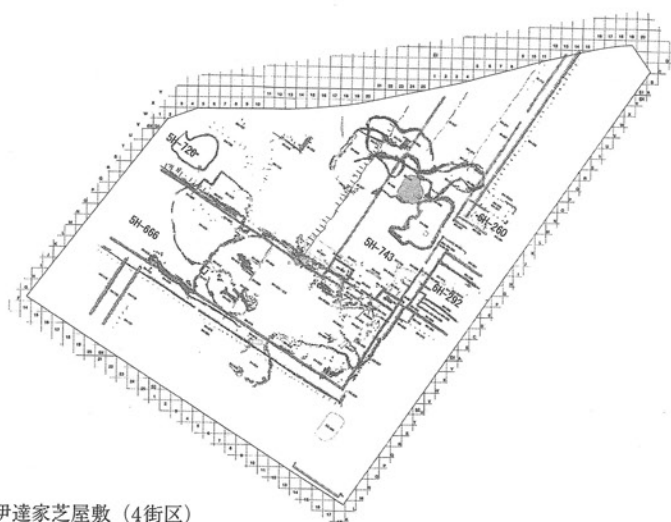
四G―〇八八二遺構は、下屋敷空間に位置する土坑で、出土陶磁器は一七世紀前半代から中頃の様相を示す。四G―〇二六九遺構は、埋め立て拡張後の中屋敷空間の溝で、延宝五年以降の遺構である。

史料に見る各家芝屋敷の変遷と主な災害

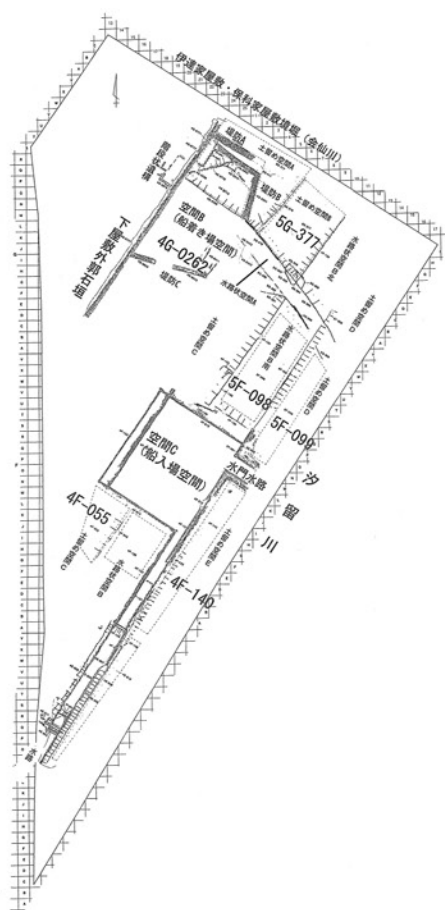
	脇坂家	伊達家	保科家
寛永9年(1632)以前	下屋敷(拝領)		
寛永16年(1639)			下屋敷(拝領)
寛永18年(1641)	大火被災	下屋敷(拝領)	
明暦3年(1657)	上屋敷へ唱替(屋敷拡張)		
明暦3年	大火被災	大火被災	大火被災
万治元年(1658)			中屋敷(唱替)
寛文8年(1668)	(被災か)	大火被災	大火被災
延宝4年(1676)		上屋敷(唱替か)(屋敷拡張)	
延宝5年(1677)			屋敷拡張 海手空地を添地
元禄16年(1703)	大地震被災		
宝永4年(1707)	幕府の道路造営による接収のため屋敷縮小		
享保3年(1718)	大火被災	大火被災	大火被災
享保9年(1724)	大火被災	大火被災	大火被災
享保16年(1731)	(不詳)	大火被災	大火被災
寛保3年(1743)		屋敷拡張	
天明4年(1784)	大火被災	大火被災	(不詳)
寛政6年(1794)	大火被災	大火被災	大火被災
文政7年(1824)	大火被災	大火被災	(不詳)
天保5年(1834)	大火被災	大火被災	(被害少ない)
明治元年(1868)			「明地」
明治3年(1870)	明治新政府による接収		



1996～2000年度調査範囲図



伊達家芝屋敷 (4街区)



保科家芝屋敷 (7・8街区)

五F—〇〇二遺構は土留め竹柵で、最も海手寄りの外郭域を形成する空間（五F—〇九九）を保持する施設である。年代は、延宝五年を下限とすると考えられる。

三 新橋停車場構内・東京馬車鉄道会社

木簡は、約三四点出土した。

新橋停車場に関わる遺構のうち、四G—〇二八二・〇二八五・〇二九三・〇三一一遺構はいずれもゴミ穴で、年代は一九一一年以前の遺構と考えられる。四G—〇三三六・四F—〇一〇遺構もゴミ穴である。

東京馬車鉄道会社に関わる遺構のうち、二F—〇二九遺構は、煉瓦の外壁をもつ車庫、二F—〇六六遺構は埋樹で、年代は煉瓦組遺構二F—〇三一一（車庫二F—〇二九の付帯施設）より新しい。二F—〇七七遺構は、車庫二F—〇二九建設以前の木組溝、覆土より明治以降の陶磁器が出土している。二F—〇九九遺構は、構内を区画する素掘りの溝で、幅は三・八m。断面は逆台形状を呈する。

なお、木簡以外の文字資料として、新橋停車場に関わるものでは、鑑札（焼印）、病院の薬札（うち一点には「芝区柴井町 躰民病院」と印刷、「東京馬車鉄道株式会社」の焼印があるブラシ、「上種水／菱形杵」「三／角杵」「□□製仕入／下総野田甲／山下平兵衛」「□□（篆書体文字）」の焼印が捺された飼葉桶などが出土している。

8 木簡の釈文・内容

一 伊達家芝屋敷

五H—六六六遺構

(1) 「納三斗七升二勺□□□」

108×14×2 011

(2) ・「寛文五年□□□□大院より

□□□□□」

・「このわた大院数□□□」

130×21×3 011

五H—七二六遺構

(3) ・「寛文四年

御米□九本内 □左衛門」

・「□□□□□」

遠田北浦村 久蔵」

130×35×4 051

五H—七四三遺構

(4) ・「く拾三戸三百□」

・「く江戸 長三郎」

98×27×6 032

(5) 「く四月十二日漬」

76×15×2 032

- (6) ・「＜粟野助右衛門様」
 ・「＞ 濱田新右衛門」
 81×20×2 032
- (7) 「＜。御上やしき□
 大立国与十郎様 本多文左衛門 奉」
 150×26×2 032
- (8) ・「＜□田」
 か、み様江 □二郎□五□ん」
 ・「＜三月廿二日 松沢」
 108×19×3 032
- (9) ・「。中塩手籠横河」
 ・「。 安藤長右衛門」
 100×18×4 011
- (10) ・「。石巻中塩手籠」
 ・「。安藤勘右衛門」
 111×12×2 011
- (11) ・「。塩引横河」
 ・「。安藤長右衛門」
 97×16×3 011
- (12) ・「。平泉手籠」
 ・「。檜木金七」
 108×18×6 011
- (13) ・「。和測」
 ・「。 小野寺□□」
 111×23×4 022
- (14) ・「。和測」
 ・「。 鈴木六兵衛」
 120×22×4 022
- (15) ・「延宝元年分 上伊沢御売米」
 ・「 四斗五升入 金ヶ崎町 御米宿 □□」
 146×(20)×3 011
- 五H二〇E
- (16) ・「貞享元年 □月廿七日 □」
 ・「□□もの□□ 内□□米 □斗□升入」
 165×27×4 051
- 六H一二六〇遺構
- (17) ・「＜松平陸奥守様中」
 ・「＞ 七□之内」
 (148)×30×6 039
- (18) ・「延寶貳年分御前金米 四斗五升」
 ・「 吉田六左衛門」
 140×27×7 051

(19) ・「延宝貳年分 御供米

四斗五升」

・「 藤田六左衛門」

143×25×7 051

(20) ・「。上諸白」

・「。あ□□」

75×17×2 022

六H—二九二遺構

(21) ・「。く御ひやうふ六双之内」

・「。〇く

野村

岩野」

148×23×4 032

(22) ・「く高橋清右衛門」

・「く 吉浜」

92×20×4 032

(23) ・「く貞享元年八月十日

・「く夏喰音羽 大和殿より上ル

御□□□」

178×30×8 032

(24) ・「。萩塩漬九拾八拾 。

・「。入木五□□百葺□大
日三十月六亥」

195×60×8 011

(25) 「。丑六月廿日

壺□塩百貳持」

202×35×10 011

(26) ・「。午ノ十月六日 海老原×

□□

(147)×30×6 019

・「。西沼村 米□表

□□

(27) ・「。松平陸奥守様御屋敷

古内造酒祐方へ御□□□□」

・「。林忠左衛門様 生嶋伯悦」

127×25×10 011

(28) ・「く。津田民部殿 望月縫殿」

・「く。松平陸奥守飛脚 江戸江登」

222×30×3 032

(29) ・「く松平陸奥守様中 成田助之丞荷物く」

・「く一子ノ四月廿日

く
316×35×10 031

荷札の記載内容で、特徴的なものを以下に挙げる。宛名における伊達家屋敷の表記は、(7)「御上やしき」(17)「松平陸奥守様中」(27)「松平陸奥守様御屋敷」などである。人名は、送り主である国元の家臣名、受け取り人である江戸詰の家臣名、名主などの農民、商人などである。(10)「石巻」(28)「遠田」(12)「平泉」(9)(11)「横川(河)」(15)「上伊沢」(「金ヶ崎町」)(26)「西沼村」はいずれも仙台藩領内の地名。品物は、「米」「塩」「粕」「酒」(20)「上諸白」「御茶」「ほつけ」(2)「このわた」などがみられる。特に「米」は、(3)「御米」「御年貢米」(15)「御売米」(18)「御前金米」(19)「御供米」など複数の表記が認められる。(8)～(11)「中塩手籠」「塩引」(12)「平泉手籠」、(13)(14)「和測」は、7～12に挙げた六日～二九二遺構以外の各遺構から出土しており、数量的には五日～七四三遺構が最も多いが、各遺構の廃絶時期を考える上で示唆的な遺物である。

二 保科家芝屋敷

四F—〇五五遺構

- (1) ・「<勝田助之進殿
木村源右衛門殿
同断□」
・「>拾斗 岩前町」
173×29×2 033

- (2) ・「延宝三年分 清兵衛」

・「新米 五斗入」
103×33×5 011

- (3) ・「江戸中橋壺丁目 大坂今はし式丁目
とりかいや中兵衛 同善兵衛」

・「愛宕保命酒」
216×52×5 011

- (4) ・「延寶三年
尾張町壺丁目
正月日」

・「拾人之内
火札
長兵衛」
104×68×10 021

四F—一三五遺構

- (5) ・「<。江戸ニ而松平土佐守内
佐善了雨」
・「>。松平土佐守内 片岡弥八郎」
238×40×7 032

四F—二四〇遺構

(6) ・「延五四月廿九日

木挽方

・「佐藤次兵衛(焼印)

酒井彦右衛門

86×40×5 021

(7) ・「井伊伯耆守内

清水加右衛門」

・「二箇之内

207×40×5 011

四G—〇二六二遺構

(8) 「。三月廿九日会津令

一柳平左衛門殿

井深茂右衛門

柳瀬三左衛門」

230×50×5 011

四G—〇二六九遺構

(9) 「。柳瀬三左衛門殿

一柳平左衛門殿

保科十郎右衛門殿

井深茂右衛門

西郷頼母

岡崎惣左衛門

日向三郎右衛門」

17×62×4 011

四G—〇八八二遺構

(10) ・「正保四年

や□□おやなし

久下田村

四月

・「保科肥後守

いろしろ

鳥見小や

み□ね

鷹場

81×69×6 021

五F—〇〇二遺構

(11) ・「辰十二月十四日

。日用□

杉若丁久兵衛

・「(焼印)

。従筆札 (焼印「廿四番」)

91×51×11 021

五F—〇九八遺構

(12) ・「延寶四年

霜月廿日

売主弥

×

・「當御役所四斗五

三田之 ×

(106) × 30 × 8 059

五G—三七七遺構

(13) ・「梶原左門つゝら」

・「梶原左門つゝら」

117 × 30 × 3 032

(14) ・「△亥

霜月九日」

・「△鶴ノほね」

121 × 20 × 2 033

(15) ・「。奥様御所へ」

・「。お蔵五尺」

140 × 60 × 11 011

(16) ・「。生諸白

わたや

長左衛門」

・「

。石沢兵助殿

□□太郎右衛門
橋間治兵衛

小川七郎左衛門」 175 × 43 × 6 011

(17) ・「(記号) 吉田五兵衛

林四右衛門

」

・「(記号) 樽さけ式拾五本」

197 × 41 × 6

(18) ・「あゆ三拾入一指」

・「五月十四日漬」

182 × 32 × 5 011

(19) ・「。林四右衛門殿

小川七左衛門

 ×

・「。春大豆

五斗

× (189) × 41 × 6 019

(20) ・「。生諸白 三斗入」

・「。藤沢八郎右衛門」

189 × 28 × 7 011

(21) ・「。会所帳箱」

・「。御臺所荷物」

217 × 27 × 7 011

(22) ・「。出雲荷物仙台二而入」

・「。寛文六年三月朔日 江戸」 85×15×3 011

四F—九—10W

(23) ・「(角九曜) 保科筑前守 荷物」

・「粕八拾樽之内 大石弥五兵衛
十二月十三日 鈴木伊兵衛様

古田市郎兵衛様」 207×54×5 011

(24) ・「。水嶋伝之助 長谷川七左衛門」

・「。水嶋伝之助 長谷川七左衛門」 196×27×5 051

(25) ・「御土蔵屋敷」

・「×三分長式寸八分鉄釘善蔵」 152×22×2 011

(26) ・「〈真綿村□□」

・「〈真綿村□□」 218×27×8 032

四F—15E区

(27) ・「延宝四

。替札 一番

三月十五日

・「。庄次郎」 88×25×5 021

(28) ・「辰三月廿五日

。替札」

・「。喜右衛門」 85×47×8 021

荷札の記載内容について、特徴的なものを以下に挙げる。宛名における保科家芝屋敷の表記は、「保科肥後守様」「保科肥後守」「肥後守御屋敷」「保科筑前守様」などがみられる。品物には、(31)「米」(32)「酒」(43)「生諸白」(44)「鮭」(45)「鯉節」などがみられる。なお(3)は同文で形状も同じ木簡がもう一点出土している。その他、伊達家芝屋敷資料同様、送り主である国元の家臣名、受け取り人である江戸詰の家臣名、商人、などの人物に関する表記が多くみられる。(4)(11)(27)(28)は鑑札。

三 新橋停車場構内・東京馬車鉄道会社

四G—〇二八二

(1) 「北海道根室国 東京市

花咲郡□納所哥

姫治□□附

吉野井殿行

南郷工場
天神町□
百一番地
天羽兵次郎

出」

165×68×7 011

四G—〇二八五

(2) ・「新橋工務課

池内満平殿」

・「□□源事務所

出」

128×42×6 011

(3)

・「□□工務^{〔郡カ〕}

池内枝手□□」

・「□屋清□□」

130×42×7 011

(4)

「<sup>〔兼□記大
カ〕</sup>元号和

130×42×7 011

四G—〇三一一

(5)

・「嶽□

・「錦楓

□□

錦楓

172×100×85 011

四G—〇三三六

(6) ・「山形県□村山郡□□佐藤茂兵衛」

・「廿七年請作納入宮崎徳兵衛」

190×20×3 011

(7) 「廿七年□作□納入 村岡権太郎

(182)×22×4 019

四F—〇一〇

(8)

・「□□」

・「〔焼印〕」

140×42×9 011

二F—〇二九

(9) ・「式七式四

。千緑」

・「式七式四

。千緑」

58×33×10 011

(10) ・「二、九七二

。高響」

・「二、九七二

。高響」

・「五三」(側面)

59×32×9 011

(11) ・「第九号□所課

・「□引替之証」

89×24×5 011

二F—〇六六

(12) 「厩用」

134×(58)×10 011

二F—〇七七

(13) 「青毛

。八才七寸五□」
〔分力〕

71×54×10 011

(14) ・「。第十六号」

・「。□」

九才八寸」

72×(27)×6 011

(15) ・「竹内昌雄」

・「□置」」

90×17×3 011

(16) 「佐藤

(59)×16×3 019

二F—〇九九

(17) 「□間様

。□造花講

地蔵□」

179×67×9 011

(18) 「〔本日力〕
□□休馬」

184×43×8 011

(19) ・「〔本日力〕
□□休馬」

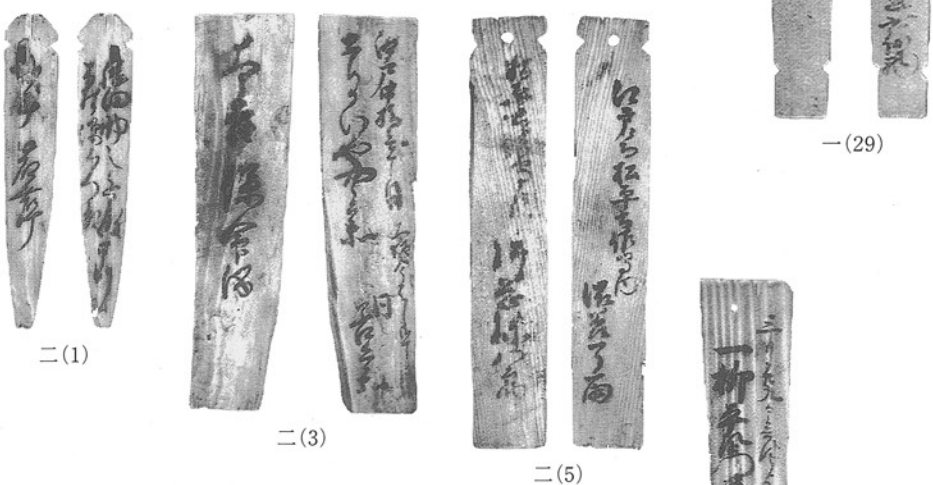
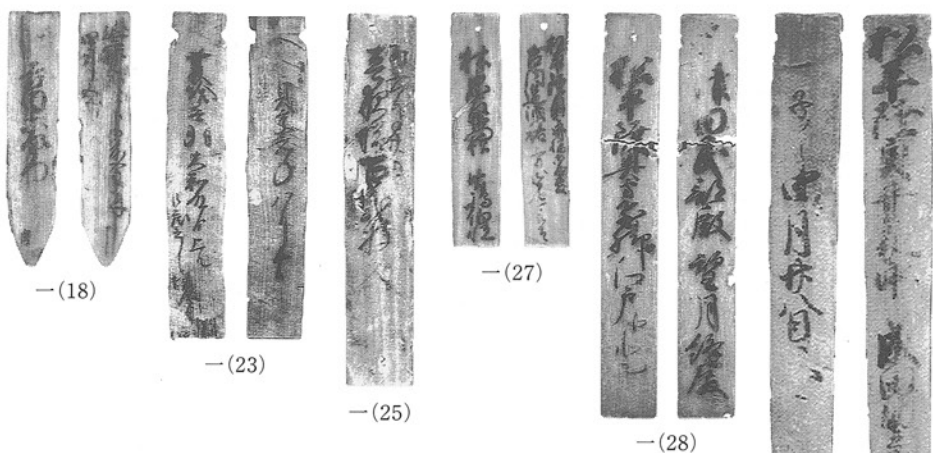
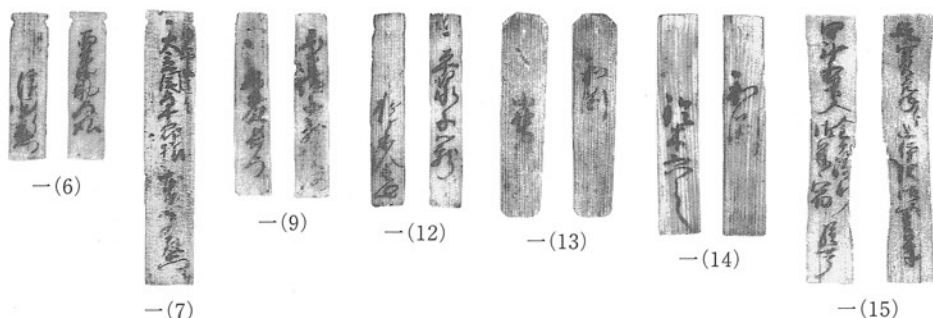
180×42×80 011

(20) ・「。休馬報」

・「。休馬報」

198×59×12 011

2007年出土の木簡



(21) 「。花市鹿毛」

184×43×8 011

(22) ・「一、一一〇」

。花鞍」

(23) ・「一、一一〇」

。花鞍」

58×34×9 011

(24) ・「。出勤」

・「。出勤」

48×23×6 011

(25) 「□水

前」(横材)

72×141×7 011

(6)(7)は荷札。(15)(16)は名札。(9)(10)(13)(14)(21)(22)は馬の登録名札である。

なお、木簡の釈読にあたっては、文献資料調査担当(当時)の船

橋明宏・宍戸知・田中桂各氏のご教示を得た。

9 関係文献

東京都埋蔵文化財センター『汐留遺跡Ⅲ』(110013年)

同『汐留遺跡Ⅳ』(11006年)

(石崎俊哉)

木簡研究 第二九号

巻頭言—考古資料としての木簡—

山中 章

二〇〇六年出土の木簡

概要 平城京跡(1) 平城京跡(2) 平城京跡(3) 平城京跡・奈良町遺跡
西大寺食堂院跡 日笠フシシダ遺跡 藤原宮跡 藤原京跡 石神遺跡
新堂遺跡(角田地区) 八条遺跡 上宮遺跡 大坂城下町跡 花屋敷
遺跡 茨木遺跡 高畑町遺跡 丁長遺跡 吉田城址 東前遺跡 西河
原宮ノ内遺跡 長浜城遺跡 松本城下町跡小池町 松本城下町跡伊勢
町 松本城下町跡本町 東條遺跡 仙台城跡 山王遺跡(八幡地区)
壇の越遺跡 志羅山遺跡 西川目遺跡 史跡山形城跡 根子荒田Ⅰ遺
跡 新田(一)遺跡 新城平岡(四)遺跡 木崎遺跡 豊穂遺跡 木
ノ新保遺跡 大町ゴンジョガリ遺跡 八幡大皆口遺跡 安吉遺跡 願
海寺城跡 富山城跡(城下町) 新堀村下遺跡 駒首湯遺跡 大堀け
遺跡 周防国府跡 史跡萩城跡(外堀) 庄・蔵本遺跡 勝瑞館跡
高松城跡(寿町二丁目地区) 鴻臚館跡 大宰府条坊跡 椿市廃寺
千堂遺跡

一九七七年以前出土の木簡(二九)

平城京跡右京一条二坊一坪 本薬師寺跡

釈文の訂正と追加(一〇)

秋田城跡(第一・八・一二号) 中屋サワ遺跡(第二五号)

大宝令施行直後の衛門府木簡群

—藤原京跡左京七条一坊出土木簡の基礎的考察—

九州特別研究会の記録

西海道の古代出土文字資料

大宰府史跡出土木簡

鴻臚館跡出土の木簡・年代・トイレ

元岡・桑原遺跡の概要と出土木簡

中原遺跡出土木簡とその周辺

市 大樹

柴田博子

酒井芳司

大庭康時・松川博一

菅波正人

田中史生

頒価 五〇〇〇円 送料六〇〇円